【132】

氏名（本籍）	古田悦造（東京都）
学位の種類	文学博士
学位記番号	博乙第362号
学位授与年月日	昭和62年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	歴史・人類学研究所
学位論文題目	**近世関東における魚肥流通の地域的展開**

主査	筑波大学教授	理学博士	黒崎千晴
副査	筑波大学教授		芳賀登
副査	筑波大学教授	文学博士	北見俊夫
副査	筑波大学教授		岩崎宏之
副査	筑波大学助教授	理学博士	高橋伸夫

論文の要旨

本研究は，近世関東地方を研究対象地域に設定し，魚肥流通の地域的展開の分析を通じて，その地域構造を歴史地理学的に究明することを企図したものであって，序論2章，第1部3章，第2部3章，結論および3つの附章からなる構成である。

序論第1章では，歴史地理学のみならず社会経済史学，民俗学など諸分野での海産物の生産・流通・消費に関する既往の諸研究の動向と成果とを批判的に検討した。その結果，従来の諸研究には，生産から消費までを一貫した分析が欠けていることを指摘している。

第2章は，生産地，流通拠点，消費地の地域間結合関係とその時代的変動を重視する視座，つまり地域的流通システム論からの分析の重要性を主張し，近世の魚肥流通に関する研究対象としては，関東地方がそれに適することを論述している。

第1部では上述の研究手法に基づき，関東の魚肥生産地域の形成・発展を主眼に，各章ごとに魚肥生産の地域的差異，生産地の集落構造や人口変動などの解明結果を述べる。

まず第1章は，関西漁民の関東出漁に関する時期的変動をイワシ漁業の豊凶期の推移と関連させることにより，開発・拡散・定着の各期に区分した。さらに出漁要因との関連から海岸地形（岩石海岸と砂浜海岸），漁法（八手網・地引網），干鰯問屋資本との結合関係および出漁先に関

する情報入手方法などの差異からの検討結果を論述している。

第2章は下総国海上郡高神村外川浦を事例として，関西漁民の移住・定着・開発過程について，集落構造に分析を加えている。その結果，この漁村が出漁母村の代表と認められる紀伊国在田郡広村のそれと共通する整然とした方格状地割をなすこと，八手網漁法に基づく漁肥生産では，船引場所有者，船主，船頭および干鰯商ともに，出身地が同一母村か親族などで地縁的・血縁的関係の結合であることを指摘する。なお外川浦の魚肥生産関係者の居住地は，各々の網元単位でまとまっており，魚肥生産を紐帯とする局地的な集住関係にあったことも解明している。

第3章は上総国山辺郡庁貝村を事例に，九十九里沿岸平野の魚肥生産地域の人口変動を，宗門人別帳・五人組帳その他の人口関係史料の丹念な分析によって追求したものである。その結果，人口の増減変動を自然的・社会的両面から分析し，地引網漁法によるイワシの豊凶漁期の変化と人口変動との関係を明らかにした。

第2部は，上述した漁肥生産地域の分析結果を踏まえ，漁肥流通の中核をなした浦賀・江戸および利根川流域各地に成立した各干鰯問屋の機能や勢力圏（集荷・出荷圏，漁村への前貸資本その他），漁肥流通に対する行政権力の介入状況などの分析から，魚肥お流通・消費の地域構造およびその変動要因の解明に主眼をおく論述である。

第1章は，近世関東での魚肥流通の核心となった干鰯問屋が，近世初頭まず浦賀に，ついで江戸市中に，さらには利根川流域の主要河岸場（関宿，境，古河など）にと順次成立した過程に言及し，漁肥流通面究明の前提条件を論述している。

第2章は，浦賀干鰯問屋を中核とする魚肥流通の地域構造究明を主題とする。浦賀問屋の漁肥集荷・出荷圏の時代的変動の分析を進めて，その変動要因には魚肥生産地域でのイワシ漁法の変化，後に成立の江戸干鰯問屋と浦賀のそれとの資本力の差違，支配者による生産地と消費地を直結する政策，消費地農業生産の動向（商品作物以外への魚肥導入）などが関連すると論述する。さらには江戸問屋との競合関係のもとで，浦賀問屋が存続した背景には尾張藩の魚肥購入政策および幕府の浦賀問屋への助成策などの介在を究明している。

第3章は江戸干鰯問屋の集荷・出荷圏の解明が主題である。その成立の契機は，関東における水田への魚肥導入と新田開発に伴う草肥減少にあり，当初の主要集荷圏が利根川舟運依存の銚子周辺にあったこと，九十九里沿岸のイワシ漁法変革に伴う生産資本の増大を契機に，前貸資金投入により集荷圏拡大化を展開し，浦賀問屋の集荷圏にも進出したことなどを解明している。なお出荷圏は関西市場と関東農村部を主としたが，関東でも下野・上野などの消費地は利根川流域の各河岸場問屋の成立から，江戸問屋の出荷圏から脱出する結果となったことを指摘し，魚肥流通圏変動過程の分析を果している。

結論では，第1部，第2部を通じて解明した結果を簡潔にまとめ，近世関東における魚肥流通の地域構造は，魚肥生産地，流通拠点たる干鰯問屋所在地および魚肥消費地における各々の諸条件が密接に相互関連して来たことを指摘し，みずからの開発した研究方法によって，これらの解

明を果した意義を論述している。

なお附章1は，江戸佃島（鮮魚供給を主とする関西漁民開拓）の集落構造解明が主眼で，魚肥生産を主とする関西漁民の開拓集落との対比を進めた論考である。附章2は，これも魚肥流通の地域構造との比較のため，流通拠点と消費市場とが一致する鮮魚流通に関し，江戸魚問屋—とくに新者場組魚問屋を事例とする究明である。附章3は，現地調査により採集した地方史料について，史料吟味の検討を進めた結果の論述である。

審　査　の　要　旨

本研究は，近世における魚肥流通の地域構造の解明を主題に，研究対象地域を関東に設定，魚肥の生産・流通・消費を一貫する地域システムとしてとらえ，流通拠点を中軸とすえる地域構造解明を意図した研究である。

長期にわたる現地調査と豊富な史料採集を基礎に，イワシ漁業の豊凶期変動，海岸地形とイワシ漁法の関連究明などの自然的要因の考察，漁肥流通からみた結節地域的な地域構造とその時代的変動に対する空間的視座からの究明など，研究手法の独創性とともに，新知見の少なくない研究成果と評価できる。

しかし，先行研究をきめ細かく探索したもののそれらの評価や研究史上の位置付けへの論及にはなお一歩の観がある。歴史地理学的研究だとの主張だが，社会経済史的手法へのこだわりも散見される。生産・流通・消費の地域的展開を一貫して把握しようとの試みは一応評価に値するが，消費面の分析には不備の面がみられ，今後は近世関東農村の諸相との関連究明が期待される。

指示した図表には，みずから発見の原資料を駆使した努力の跡が著しいが，なお事象の相互関連とか諸要因の複合関係などを示す図表類が少く，空間関係からの究明という面からの新工夫を要請されるところがある。

このような欠点がみられるものの，従前から各分野にわたり数多くの研究成果の蓄積がある研究対象と対象地域に対して，度重なる現地調査，原史料の丹念な分析と活用，さらには新規の研究手法の開発などにより，少なからぬ新知見解明が認められる。ことに近世の地域間流通に関しては，今日もなお十分な研究成果の蓄積が乏しい歴史地理学の現段階に対し，その水準向上に有意義な基礎研究をなす成果であると評価する。

よって，著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。